

J-BISC の主題検索利用 ——利用者への端末開放：学生の反応——

丸 本 郁 子

Ikuko Maromoto: J-BISC(CD-ROM)for Information Retrieval

—Students' Use at a Junior College—

1 はじめに

情報のデータ・ベース化の進行にともない、図書館サービスは形態のみならず質的な変化が起きている。コンピュータは図書館のハウスキーピングの合理化をすすめるだけでなく、情報検索に用いられるようになり利用者の多面的な情報要求に応えられるようになりつつある。倉田等の「大学図書館の将来像に関する意識調査」(109)を見ると、現在すでに全国の主要大学図書館の目録がコンピュータ化されつつあり、OPAC化された(利用者が目録カードによらず端末から書誌情報を探せるようになっている)ところは、28.5%であり、5年以内にそうなるであろうと予測されている所は33%である。つまりここ5年以内には半数以上の大学図書館がOPACとなる予測がされている。公共図書館においてもコンピュータの普及は目覚ましく「現代の図書館」(vol. 27, no. 2)誌上に特集されているように利用者に端末を開放している館も増してきた。

一方、短期大学図書館の現状を見ると、一見コンピュータ化はされているようでありながら、トータルシステムとして活用するにはオフコンレベルのハードウェアを必要とするため、未だに大部分の館はパソコンを用いてのハウスキーピング面での利用に留まっている。情報検索利用としては、パソコンを端末として用い外部データベースにオンラインでアクセスをする形のサービスは行われつつあるが、それも有料でありかなり高額になるので教員・研究者の利用が主であり、学生にとってのものではない。本学図書館もその例にもれない。

しかし、その状況を一挙に変える可能性がでてきたのがCD-ROMの出現である。本学図書館では、オンラインに代わるオンディスク情報検索の可能性に着眼し、学生にも主題検索を保証するために、早速パソコン上で稼働できる

J-BISC を導入した。この小論は、主題検索手段の必要性、J-BISC の概要、利用者による主題検索ツールとして用いた場合の J-BISC の可能性と限界、本学での利用形態および利用者（学生）の反応を記して考察をくわえている。

Ⅱ 主題検索手段の必要性

一般的な利用者の資料要求は圧倒的に主題からのアプローチであるように思えるが、日本の図書館界はそれに十分に答えていない。館内図書の主題による検索手段として最も多く備えられているものは分類目録であるが、それも椎葉によると重出がなされ索引も含む完全な体系となっているものは少ない。コトバによる検索を可能にする件名目録や辞書体目録にいたっては、その設置率は2%にすら達せず、しかもその件名目録もいって「未発達」の状態であるという（椎葉82-89）。

本学の図書館の状況は、その日本の平均的図書館そのものであり、館内図書の主題検索手段は分類目録と称している書架目録のみである。つまり本学ではある図書に与えられている分類番号は一個であるから、その図書の主題の一面しか表現していない。その不備を補うために本学図書館の行っていることは冊子体の二次資料を可能な限り購入すること、また分類目録のカードボックス上に「日本十進分類法」を多数用意して並べ、その相関索引を利用してコトバから分類番号を探し出せる手段を提供していることなどである。この二重手間を学生に「理解」し協力してもらうためにも、オリエンテーションを始めガイダンスまた授業形態の利用者教育を丁寧に行っている。件名目録の作成は、それが望ましいと分かりながら人手不足と図書館員の訓練不足とにより実現されずに現在に至っている。この状況の改善は目録をデータベース化し OPAC の形がとれた時点で行う見通しである。

しかし、利用者側の状況はカリキュラムの改定により急速に変化し、学生が図書館資料へ依存する度合いが増し、特に主題検索をする必要が出てきた。本学は英語科であるから英語の運用能力をつけることが学科の主目標であるが、新カリキュラムではそれを単に技術面のみで捕らえるのではなく、現代の社会の状況を理解しそこに自分がコミットする姿勢を育てるような事柄を学ぶことを通じて行う形になっている（大阪女学院短期大学カリキュラム委員会189-209）。二年生の必修科目であるトピック・スタディーでは特定のテーマの下に、

資料を読み、それについて討論をし、かつレポートを書くことが求められる。トピックの例としては、人間と環境、人と野生動物、女性学入門、世界の家族、アメリカ黒人の詩、アメリカ女性作家、世界の少数民族など22項目がある。つまり学生は、その科目を学ぶためには、上記のテーマに関する図書館資料を用いて、討論やレポートを書くための情報を収集することが必須となっている。

図書館側の対応としては、指定図書制度や各クラスに合わせた文献リストまたパスファインダーの作成を行っているが、学生の資料要求は多岐にわたり対処しきれない面がある。各自が主体的に主題アプローチで多角的に資料を検索する手段を講じることは急務となった。

Ⅲ CD-ROM(Compact Disk-Read Only Memory)の特性

CD-ROMとは音楽のコンパクトディスクとして一般に良く知られているものと同じ媒体である。優れている点としてその大容量であること、データへのアクセシビリティの高さ、そして経済性があげられる。形態は直径12cmの小型の円盤であるが、そこに500-600メガバイトの情報を記録することができる。また納められた個々の情報に高速かつランダムにアクセスができる。しかも大型コンピュータを用いなくともパソコンでもって、通信や検索にかかる費用を気にすることもなく必要なだけ時間をかけてデータベースを利用できる。専門のサーチャーも必要ではない。耐久性は材質の関係で金属の腐食が起るため現在ではおよそ10年と考えられている。つまり情報の保存媒体としての使用というより検索手段として用いることに適した媒体といえる。

Ⅳ J-BISC(Japan Biblio-Disc)とは

J-BISCとは国立国会図書館が作成し頒布している磁気テープに収録されているJAPAN/MARCをCD-ROM化したもので、日本図書館協会が販売をしている。したがってそのデータは基本的にはJAPAN/MARCや「日本全国書誌」と同じである。つまり国内で発行された出版物であれば市販資料のみでなく官公庁資料・非売資料をも含んでいる。ただし逐次刊行物と非図書資料は含まれていない。JAPAN/MARCよりも「多様なアクセスを保証するため」(相

原5) そのデータの一部に自動カナふり, 分ちがき等により検索キーが追加されている。CO-ROM に収録できる JAPAN/MARC レコードは約50万件(10年分)とされている(鶴田564)。データは年4回更新されている。1989年9月現在で同年度の第2版が出されているが, 収録範囲は1980年1月から1989年8月までで, 総データ数は4月の時点で約52万件である。利用機関は1988年8月に145機関であったが1989年5月現在で267機関と急増している(千賀341)。

J-BISC の作成意図は, これに検索機能のみならず図書カード作成機能やダウンロード機能があることでも明らかなように, 図書館内部作業のために図書館員による利用を意図して作られている。しかし, 短期大学図書館の状況の中では先にも述べたごとく, これを情報検索手段として利用者に開放することが必要になっている。

V J-BISC の可能性

J-BISC の可能性についてはその操作性に関して作成者の立場から相原等が, また発売元である日本図書館協会から「図書館雑誌」誌上に千賀が連載をしている。したがって, ここでは利用者の立場で, しかもこれを一般の利用者(短期大学の学生)が情報検索の目的で使用することを前提に考察する。

まず第一に利用の手軽さがあげられる。冊子体の「日本全国書誌」を使用するとすれば, 何冊にも分かれて書棚何段をも占めている中から必要な情報を含んでいると思われる巻を時には何冊も手に取り検索しなければならないが, J-BISC であればたった一枚のディスクの前に座ったまま検索できる。

しかも情報は年4回の更新であるから, 冊子体より新鮮である。

次に冊子体目録に比べてアクセスポイントの多様性があげられる。基本機能として書名, 著者名, 件名, NDL 分類番号, NDC 分類番号, 刊行年, 出版社, ISBN, 官公庁コード, その他の項目からの検索が可能となっている。利用者の主題検索の観点から見ると, フリータームのキーワード検索が, 書名中に用いられている語については副書名にある語をも含んで, 可能となっている点が便利である。標目は分ち書きがされてありインデックス・キーは前方一致であるため, 目録カードや冊子体の目録では冒頭の語からしか検索できなかったものが, どの語からであっても書名中に含まれていれば検索できるのはコンピュータ検索ならではの長所である。

利用者にとって主題検索をするのにコトバが一番とりつき易いことは当然であるが、書名中に含まれている自然語のキーワード検索では、もし書名中にそのコトバが用いられていない場合であるとか、また同じ概念を表現している異なったコトバが書名中に用いられている場合には検索もれが生じる。そこにコトバをコントロールをした件名検索の意義がある。J-BISC においてこの件名検索が可能となっていることは、待ち望んでいた夢の実現ともいえる。しかも「国立国会図書館件名標目表(NDLSH)」が準備されているので、利用者はそれで確認をして検索ができる。しかし、この点に関し千賀は「図書館雑誌」上に非常にユニークな件名の見つけ方を紹介している(479-80)。件名利用のツールである「国立国会図書館件名標目表」はかならずしも使い易くない。そこで千賀はまず知りたい事柄を表現するコトバを何であれ思いつくものを取りあえず書名にキーインすることを勧めている。そこで何かの図書が検索されてきたら、その詳細画面を呼び出し、そこに付与されている件名を見ることにより件名を知る。そしてその件名を用いて主題に関する図書をあらたに検索する、という方法である。一見図書館員にとっては常識破りな検索法であるが、一般の利用者にとっては、これもコンピュータ検索ならではの現実に即した利用法といえるかもしれない。

また、同様に書名のキーワードと件名との組み合わせを用いることにより、巧みに主題検索の効率をあげる方法を学生が発見している。とりあえず思いつきキーワードで書名からの検索をして、その語を含む図書の一覧を出す。しかし、書名を見ただけではその図書の主題が分からないものも多い。そこで詳細画面を呼びだし、そこでその図書に与えられている件名を見ることにより、それが自分の求めている情報を含むものであるかどうかの判断をするという方法である。

大部分の一般の利用者は検索キーを正確に使用できない。情報要求は主題検索はもとより、書名であれ著者名であれ、その一部を不正確な形で覚えている状態で表現される。著者名の一部しか知らないとか、読みは覚えていても漢字は分からない、また書名の一部をうろ覚えをしているなどである。それに対して J-BISC はかなり有効に対処してくれる。まず検索キーは表記形での検索つまり漢字・ひらがな・かたかな・英数字など、表記されているものそのままの検索のみでなく、ヨミでの検索ができるので個人名など不正確な記憶をしていても検索が可能である。一応ルックアップ機能もあるので、正式名が分か

らなくとも、分かっている部分で入力し確認をすることができる。またインデクシングが先に述べたように前方一致なので完全一致のオンライン検索であるようにトランケーション指示などをする必要もない(相原8)。分ち書きを意識せずに思いつく語で入力しても情報が得られることは素人には便利であろう。また前方一致である点は分類番号での検索にも便利で、細かい分類番号の細目まで分からない素人が検索する場合、一応分かっている範囲内の3次区分あたりまで入力すれば検索できるのも実用的な配慮である。

次にコンピュータ検索の特徴である複合検索が可能な点がある。キーワードの間に「*」を入れてAND検索が、「+」を入れることによってOR検索ができる。書名、著者名、件名、分類番号その他の項目内だけでなく、書名と出版年などのように項目間の複合検索も可能である。たとえば「人と野生動物」のトピックの学生が資料を探す場合、「自然保護」の件名では260件も検出される。そこで、これを「自然保護*動物」とすることにより、適切な文献が6件と絞りこめてくる。「マイノリティー」をトピックとする学生が「チョウセンジン*ニホンザイリユウ」で検索すると174件も出てくる。それに出版年「1987-1989年」を組み合わせると42件と絞りこめる。

利用者による検索で一番大切なことは、操作が簡単であることだ。特にコンピュータ・リテラシーの行き渡っていない現在、機械検索に向かわせるには、とりつき易い形でなければならない。J-BISCにおいては検索手段としてコマンド検索のみでなくメニュー画面検索が用意されている。利用者はメニュー画面上をカーソルを動かすだけで、自分の用いたい検索項目を選び、検索条件を入力したらよい。この場合は検索式を作ったりコマンドを特に覚える必要がない。

もう一点、利用者が使用するツールとしてJ-BISCの便利な点は、これが有料のオンライン検索とことなり、時間や検索件数を気にすることなく自分の納得のいくまで操作をし検索できることである。

VI J-BISCの限界・問題点

この点については寒川が参考業務にJ-BISCを用いた経験をもとに詳細な発表表をしているが、ここでは利用者に端末を開放しての利用という面から述べる。とはいえ、ここに含まれている問題点はJ-BISCそのものに対するものと

いうよりは、パソコンの機能や容量面での限界や CD-ROM の限界、また国立国会図書館の目録規則や JAPAN/MARC フォーマットに関するものがあるが、利用者が感ずる不便さという観点から考える意味で同一に論じた。

第一に含まれているデータに時間的な限界がある。現在の所1980年以降の資料しか含まれていない。また季刊であるため新刊書情報のタイムラグも3ヶ月以上のずれは生ずることを心得ていなければならない。

ディスプレイ画面へのデータ表示スピードが遅い。一画面に17件表示するのであるが、全体を表示しきるまでに26秒かかる。次画面の表示をする場合には上から一行ずつ変わっていくので、それにも時間がかかる。またスクロールする場合、画面をスキップすることができず必ず一画面ずつ順に全てのデータを表示しながら移らねばならないので、検索件数が多い時などには忍耐がいる。

件名の検索にかなり制約がある。本来主題検索においては、自然語を用いて書名の中からデータを検索するより、件名を用いての検索の方が確実であると考えられるのだが、J-BISC は必ずしもそうではない。マニュアルを丁寧に読み、特性を理解して検索しないと出てこない。細目や付記がある件名は、それ等を件名標目表の表示どおり入力しても検索されない。例えば「民族—オーストラリア」では出てこない。しかしこれを「民族*オーストラリア」とすると8件検索された。つまり細目や付記は必ずそれぞれの項目を独立したインデックスとして複合検索をしなければならない。また長い細目がある件名をヨミによって検索を行おうとすると出てこない。相原等の”和図書検索ツールとしてのJ-BISC”に説明されているが、JAPAN/MARC のデータの中には細目が長い時には最後までヨミをふっていないものがある(11)。つまり漢字形からは各項目を AND 検索にすれば出てくるが、ヨミによっては検索できないものがあることになる。この他、書名や著者名の場合と異なり、件名は分かち書きがされていないので、たとえば人名検索を行おうと思っても名前のみからの検索は不可能である。この例でも分かるように件名検索には書名や著者名検索のようなフレキシビリティが与えられてないのである。

また、件名の付与数の少なさが主題検索を行う上でやはり最大の不満点となる。これは J-BISC 固有の問題ではなく、国立国会図書館の目録作成方針の問題であり、コンピュータ化にともない問題がより明確になったというべきだろう。国立国会図書館の千賀は”件名と検索”の中で「件名は、今のところ単行書として刊行された図書には、その図書総体の主題に対して付与され、章ごと

や収録論文ごと付与されているわけではない」(404)と明記している。しかし、実際にある主題の図書を検索しようとすれば、椎葉が以前から力説しているごとく、一冊の図書の中に含まれている情報を一または二個の上位概念の件名で表現することでは不十分なのである(358)。筆者の授業のトピックは「児童文学の中に表れている人間観」であるが、たとえば清水真砂子の「子どもの本の現在」(大和書房1984)の中に、学生に差別表現に関して読ませたい大変優れた論文がある。しかし、この図書に与えられている件名は「児童文学」のみであるから、件名のみからでは引きだせない。その意味では児童文学に関する図書の大部分は「児童文学」という件名一個しか与えてなく、それで検索すると127件もの図書が出てきて、素人の学生には一体どれを選んだらよいのか見当もつかない。これは他のどのテーマについても言えることで、たとえ複合検索によって絞り込もうと思っても始めからその件名が付与されていないのは当然、検索されないことになる。もう少し掘下げた主題分析を行わない限り、図書の真の活用はなされない。

この点に関し、千賀は同論文中において「多くて4つまでという付与件数は、1冊の件名付与の単位とすれば、概して検索に支障はないといえよう」(403)と書いている。しかし、何を根拠に支障がないと言えるのか疑問である。寒川も述べているが「余りにも簡単に『答え』と思われるものがでてしまう」また「それなりに『結果』が出る」(1989年2月9日発表)というに過ぎないのではなからうか。図書館員にとっては何かが出ればよいのかもかもしれないが、利用者にとっては適合率が問題なのである。コンピュータは入れていない情報は提供してくれない。コンピュータ検索については、一見、複合検索などで「きめ細かな」検索ができるようなイメージがあるので、それが実際には不可能であることへの失望は大きい。千賀は今までに件名付与数を多くしなかった原因はカード目録を維持・管理する関係があったと述べて(401-3)「機械検索に限定して件名を考えた場合、図書の主題に即した件名付与が可能であり、またそうしなければ検索効率を上げることができない(401)」とも書いている。JAPAN/MARCの作成が開始されてからの時間の推移を考えると、技術的には可能であると分かっていることが実行に移されないのは、担当者の意識の中で「検索効率を上げることができない」という認識よりも「支障がない」という見解にウエイトがかかっていたのではなからうか。これからは、より細かな主題分析を必要とするという利用者の意見を強力に打ち出す必要がある。

複合検索をするには時間がかかるので、いくつかの工夫がある。寒川が例をあげているが「日本*伝記」で検索すると2分36秒もかかるが、「伝記*日本」であれば出現件数は同じであるが所用時間は27秒である(142)。つまり検索効率をあげるためには、まず小集合を作りそれに大集合を掛け合わせるとよい。

機械検索による主題検索をするためには、欠くことのできないツールとしてマニュアルと件名標目表があげられる。しかし、この両者とも J-BISC の場合は図書館員による利用を前提としているので、専門家対象であり、素人の利用者には使いにくい。マニュアルの方は、対象利用者に合わせたものを作成することは可能であり、本学においても一応そのように対処している。しかし、件名標目表に関しては勝手に作成する訳にはいかない。あくまで「国立国会図書館件名標目表」に依存することになる。利用者の観点から件名標目表の目的を言えば、それは自分で思いついたコトバを鍵にして思いついたらなかったコトバへと導かれ、検索もれがないようにすることである。つまりそれは単なる標目の羅列では意味がなく、コトバに関連付けをし一つのシステムとなっていることが期待される。しかし「国立国会図書館件名標目表」の参照関係を見ると、「見よ参照」はあるのだが「をも見よ参照」が事実上ほとんどない。これは椎葉がすでに1982年に指摘していることであるが「NDLSH において標目間の関連がないために、検索の際に単発的、恣意的なアプローチしかできない」(101)ことになるのである。椎葉はまた同論文中に NDLSH の分類体系順の表が参照機能を殆ど果たしていないとも言っている(105)。今後、一般利用者がこの標目表を利用することは必須となるであろうから、早い時点でシステムティックなシソーラス化が進められることを期待する。同時に標目表の利用法の解説をしている序文の充実や、標目を読みやすくまた探しやすいするために「BSH 基本件名標目表」のようにヨミを与えるなどの工夫もほしい。

Ⅶ 大阪女学院図書館における J-BISC 利用形態

本学で J-BISC 用に使用しているシステムは、本体が PC-9801 VX21 で CD ドライブは PC-CD101 を用いている。利用者に開放している機器は一台のみで、貸し出し・返却カウンターに隣接しているカウンターの一部に設置し、必要があれば図書館員がすぐ助言できる位置にある。

学生への利用指導は、授業として行われている利用者教育の学科中の一時

間(50分)を用いた。指導内容はメニュー検索のみとした。学生は英語科であるので英文タイプライターは一応うてる。したがって基本的なキーボードの名称およびファンクションキーの使い方を説明し、ローマ字入力、カナキーワードでの検索を中心に各検索キーでの検索、複合検索、ルックアップ機能、印刷機能等を説明した。指導方法は、口頭による J-BISC の概要説明の後、機器そのものは教室にはないので、キーボードの図面をプリントした配付資料と OHP での拡大図を用いて操作説明をした。機器操作のマニュアルを作成し各自に配付すると同時に図書館内の機器の脇に置いた。今年度この授業を前期に受けた学生数は2クラスで各55名、合計110名であった。

学生の情報要求としては、先に述べたごとくトピック・スタディーの科目のために、自分のテーマに関する資料を集める必要がある。そこで利用者教育科目の中では、各自がそのテーマに関する書誌を作成する課題を出した。学生は館内図書の検索手段としての目録カードの利用法と冊子体の書誌・文献目録類(各種の主題書誌類、「雑誌記事索引」「日本件名図書目録」「出版年鑑」「Year's Book」「ブックページ」その他)の利用法の授業は既に受けている。したがって大部分の学生は主として冊子体の書誌類とカード目録を用いて文献調査を行うのであるが、J-BISC の利用はそれを補う形として指導した。実際の利用は、一台の端末を少なくとも110名の学生が用いるのであるから、図書館では登録制にして混雑をさばいた。授業を受けなかった学生の中からも友達か利用しているのを見て使用する例も出てきた。

Ⅶ 学生の反応

後期が開始されて直後、先の2クラスの学生に対し、J-BISC の利用に関し簡単な意識調査をアンケート形式で行った。回収は38名と32名、合計70名であり64%の回収率であった。未解答の36%の学生は機器を未使用の学生であり、その意味ではこの回収率は即、指導学生中の J-BISC の利用率ともいえる。ただし、未使用の理由は主として機器が一台であったため、利用チャンスがつかめなかったためである。

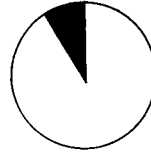
質問内容と解答結果の概要は以下のとおりである。

1「J-BISC で自分のテーマの資料を探せるようになりましたか」

はい 63名(90%) いいえ 7名(10%)

使えるようになったか

- はい
■ いいえ



2 「J-BISC の便利な点は何ですか」

解答は自由記入方式であったので、類似のものをまとめて多い順に記すと次のようになる。内容的には重なるものもある。

素早く情報が入手できる。	32名
手軽で簡単に情報が得られる。 (歩き回らず、一箇所で、多くのものに当たらずにすむ…)	20名
自由なキーワードで探せる。	12名
多面的な検索ができる。	9名
多くの情報が素早く得られる	9名
複合検索ができる。	7名
文献の詳細データが見られる	2名
関連図書が多くでてくる	2名
プリントアウトができる	2名
情報が新しい	1名

3 「J-BISC の利用で不便を感じたことを具体的にあげてください」

各画面が一行ずつ出てから動くので時間がかかる (スキップできない、ヤ行ワ行は困る、反応がにぶい…)	21名
慣れないので操作がむづかしい	15名
出るものが多過ぎて、必要なものが分からない (すぐオーバーフローするのが困る…)	13名
1980年以前のもので出ない	10名
端末の台数不足	8名
操作がめんどろ	7名
入力は少しの違いでも情報がでない (19と十九)	7名
時々、何も反応しない時がある	4名
操作ミスをするると出てこない	3名

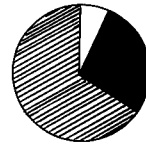
思ったキーワードで出てこない	1名
件名で出てこないものがある	1名
印刷の機能が作動しにくい	1名

4「これから必要な図書を探すとき冊子体と J-BISC のどちらを用いたいと思いますか」

冊子体を用いる	4名	(5.6%)
J-BISC を用いる	20名	(28.6%)
両方を用いる	45名	(64.3%)

用いる目録の形態

- 冊子体
- J-BISC
- ▨ 両方



「その理由を書いてください」

A 冊子体を用いたい理由

機械に弱い、コンピュータに抵抗がある	3名
選びながらゆっくり探す方が好き	3名
本は一覧性があり便利	2名
最近のある年度のものの場合「ブックページ」	
「Years' Book」などでも十分	1名
慣れている方を使いたい	1名
端末が1台なので使えないから	1名
J-BISC は多く出ると時間がかかる	1名

B J-BISC を使いたい理由

操作を覚えたら簡単だから	5名
時間が短縮できるから	3名
楽だから (一箇所ですむ)	2名
正確で早いから	1名

組み合わせで絞り込めるから	1名
「件名図書目録」などでは適当な検索語を 考えだせないから	1名
便利だから	1名
内容が見られるから	1名
プリントアウトができるから	1名
急いでとりあえず何か欲しい時	1名
操作が面白いから	1名

C 両方を用いたい理由

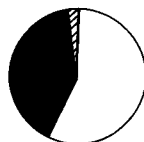
相互にカバーしあっているから	39名
(古いものは冊子体, 新しいものは J-BISC	11名)
(機器が1台なので混んでいる時は本を	6名)
(J-BISC には載ってないものがある	6名)
(まず J-BISC を用い補うために本を	4名)
どちらも便利だから	3名
どちらも使えるようになりたいから	1名

5 「J-BISC であるテーマの図書を探す時、どれで探すことが多いですか」

書名中のキーワードで探す	41名	(58.6%)
件名を用いて探す	30名	(42.9%)
NDC を用いて探す	1名	(1.4%)

検索キーは何か

- キーワード
■ 件名
▨ NDC



IX 考察とまとめ

上記の調査結果によって、J-BISC は一般利用者が主題検索手段として充分に用いることができ、かつ大いに期待もされているツールであることが分か

る。わずか1時間ほどの利用指導を行ったのみで学生はこれをかなり効果的に用いられるようになった。機器の操作性にはいくつかわずらわしい点があるにもかかわらず、学生たちは今後情報要求がある場合には積極的に用いていきたいとの意欲を示している。このことでも明らかなように、CD-ROMによるデータベースへの主題検索を可能にしたことにより、J-BISCは利用者の要求に對し的確に答えていることが分かる。

J-BISCは今後、この手軽さ、便利さ、実用性を考えると他の図書館においても大いに活用されていくであろうと予測される。またCD-ROMとしての利用というだけでなく、そのデータがダウンロードされてそれぞれの自館目録の一部へと組み込まれての活用もされていくであろう。そこで期待したいことは、今ここに明らかにされてきた不備の改善である。

技術的な問題は他の論文にくわしいのでそれ等に譲るとして、主題検索のツールとして使用する一点に絞って望むことは件名検索の充実である。J-BISCは書名中に含まれているキーワードによる検索はかなり充実している。しかし書名と件名の関係を調べた調査によれば、書名中に件名と合致するコトバが見い出せるケースは50%程度である(「件名作業の現状と今後」115)。つまり書名中の語に依存した主題検索の信頼度は50%程度に過ぎないのである。学生の検索キーの選択を見ても、一見利用者には取り付きやすく思われる書名中のキーワードのみに頼るのではなく、件名による検索を行っている率も高いことがそれを証明していると思われる。J-BISCの件名検索の充実ということは、すなわち根本の国立国会図書館の目録作成方針に関わることであるが、第一に望みたいのは件名付与数の増加であり、同時に件名標目表のシソーラス化である。細野等の国産データベース利用機関への調査報告においても、同様な点が指摘されている。つまり国産データベースに対する利用各機関の要望の中で大きなものとして「ディスクリプターの絶対数の増大」と「シソーラスの充実」があげられている(89-90)。J-BISCという新しい検索手段の有用性を高めるということは、とりもなおさず以前から指摘されている目録作業の基本的な問題の解決がせまられていると言えよう。

引用文献

相原信也 和図書検索ツールとしてのJ-BISC—インデクシングおよび操作性について

- 一前編「科学技術文献サービス」89（1989）：4-13
- 大阪女学院短期大学カリキュラム委員会 スキル・トレーニングの限界のかなた—大阪女学院短期大学専門科目A群新カリキュラム1年目を終えて—「大阪女学院短期大学紀要」19（1988）：189-209.
- 倉田敬子・神門典子・上田修一 大学図書館の将来像に関する意識調査「大学図書館研究」36（1989）：105-114.
- 寒川登 JBISC—私的案内—「びぶろす」40：6（1989）：8-13.
- 寒川登 「発表：参考業務におけるJ-BISC等の応用」昭和63年度近畿公共図書館参考事務研究会 1989年2月9日。
- 鶴田真也 JAPAN MARK CD-ROM 研究開発特別委員会報告「図書館雑誌」81：9（1987. 9）：564-565.
- 椎葉倅子 国立国会図書館件名標目表の構成についての一考察「図書館学会年報」28：3（1982）：97-109.
- 椎葉倅子 オンライン目録における主題アクセス：BOOKS—の場合「知識の組織化と図書館：もり・きよし先生喜寿記念論文集」もり・きよし先生喜寿記念会，1983，343-359.
- 椎葉倅子 主題検索（件名目録）の今日的課題：件名による資料検索法の研究「専修大学人文科学年報」17（1988）：81-110.
- 千賀正之 NDCとJ-BISC 検索—J-BISC 主題検索の基礎知識「図書館雑誌」83：6（1989. 6）：341-344 件名と検索「図書館雑誌」83：7（1989. 7）：400-403，83：8（1989）：179-482 NDL 分類と検索「図書館雑誌」83：9（1989）：596-599.
- 細野公男，藤野千代子 利用の側面からみた国産データベースの特徴 *Library And Information Science* 24(1987)：81-92.
- 特集：利用者目録の新形態 「現代の図書館」27：2（1989）：66-101.
- 件名作業の現状と今後 「図書館研究シリーズ No. 27」国立国会図書館（千賀正之 件名と検索 「図書館雑誌」83：8（1989）：481）

(Received November 1, 1989)